

2015年3月13日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一五年二月の「森三郎の作品を読む会」では、

『赤い鳥』昭和8年7月号初出の二作品を読みました。

「一人相撲」(『森三郎童話選集 夜長物語』所収)・「乳母」

「一人相撲」とは、二人で相撲をとっているような所作を一人で見せる芸で、神事・大道芸として行われたものです。森三郎のこの「一人相撲」は、大道芸の話です。

主人公の庄太は、寺子屋の帰りに小間物屋「紅久」でおばさんに頼まれた棒紅を買うために、八百屋の勘ちゃんと連れだって広小路に回ります。勘ちゃんは、店の手伝いで広小路の方にはよく行っています。

「廣小路と言えば、下町でも指おりの盛り場なので、あつちこつちに、いろんな見世物小屋なぞがあつて、お祭りのような、そうぞうしさでした。」(原文は旧仮名遣い)その中に「一人相撲」の大道芸も出ていました。しかし、そこで「一人相撲」を見ているうちに、巾着をすり取られて、おばさんから預かったお金を失くしてしまします。

庄太には、もともと、子どもだけで行ったことについて、わずかな後ろめたさが二つあります。一つは、「飴ん棒」の駄賃に負けて、小間物屋へ紅を買いに行くことを引き受けてしまったこと、二つ目は、「紅久」について行ってもらった勘ちゃんに誘われて、「一人相撲」を見てしまったことです。大人の世界を垣間見てしまったことが、苦い思いにつながります。お母さんに「これからは、おばさんに頼まれても、こどもだけで行つてはいけない」と言われた時、庄太はむしろほっとしたことでしょう。

作者森三郎は、子どもとして守られている安堵感と、大人への入り口に立つ少年の揺れる心情を描こうとしたのではないでしょう。

この作品は、庄太が一人相撲のおじいさんの口真似をするところで終わっています。確かに一人相撲の描写は、臨場感のある書き方で、少年の耳にその声が余韻となつて聞こえるのもうなずけます。

『江戸大道芸事典』(宮尾與男編著・柏書房)によれば、『江戸府内絵本風俗往来』に次のように書かれています。

「一人相撲の囲りに人山をなす。此方ア荒馬く、此方ア小柳く、と行事を勤る中、看客は荒馬と呼ぶあり、小柳と叫ぶは、人々の愛顧相撲なるべく、荒馬、小柳、双方競ふて投銭なす。」

森三郎の「一人相撲」にも「東イ綾瀬川ア、く、西イ小柳イ、く」と出てきます。どちらも相撲人名鑑に出てくる江戸時代末期の実在の関取名ですが、同時期に在位していたのではないようです。有名な関取の名前を使ったそんな大道芸を、三郎さんも実際に見たことがあるのではないかと思えるほどの、具体的な描写です。

二月の「作品を読む会」で読んだもう一編「乳母」(筆名・早川七郎)も、当時の実際の様子を童話にまとめたものではないかと思われまます。テーマも「一人相撲」と類似しています。町にある小さな寄席に「活動」がかかる日には、町の子どもたちが五六人、一間もある長い旗幟をかついで、宣伝の楽隊に連なつて歩きます。ただで活動が見られる上に、お小遣いまでももらえるからです。母のない「私」は、尋常三年の時、おばあさんに内緒でこの列に加わります。その時、乳母であつたまさに遭遇するのですが、まさは「坊ちやま、おばあさまのおっしゃることをよくお聞きになるんですよ。」と声をかけます。「喜劇、成金」という活動の幟は、一九二五(大正一四)年のバスター・キートンのサイレント喜劇「西武成金」を指しているのかもしれない。刈谷の大黒座で、昭和十年代前半に同じような経験をしたという会員の話もあつて、興味深く思いました。

● 次回予定 4月10日(金)午後1時〜3時

——保澤やす子さん(森三郎さん長女)を囲んで

森三郎作品の理解を深めるために——